

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	エロース・アガペーと甘え
Author(s)	黄, 萍
Citation	HABITUS , 26 : 17 - 37
Issue Date	2022-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/52146
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052146
Right	
Relation	



エロス・アガペーと甘え

黄 萍

(燕山大学講師)

第一節 プラトンの愛論——エロス

結合欲求としてのエロスの源流は、プラトン（Πλάτων Plátōn, 前 427-前 347）の作品『饗宴』¹⁾に求められる。

『饗宴』は、ファイドロス、パウサニヤス、エリュクシマコス、アリストファネス、アガトン、ソクラテスの六人が、ギリシア神話の愛の神エロス²⁾を称えるという形で進んでいく。

ファイドロスは、エロスは偉大な神であり、生まれが最古であるがゆえにもっとも崇敬すべきものであり、また徳と幸福との獲得に当たっては最も権威ある指導者であり、讃えられるべきものであるという³⁾。それに対してパウサニヤスが反論する。二種類の美の女神アフロディーテには二種類のエロスがいるという⁴⁾。下等な大衆を意味するパンデモス・アフロディーテに属するエロスは節操無く誰に対しても向かう愛である。他方、純粹で高尚な愛を意味するウラニア・アフロディーテに属するエロスは純粹な少年への愛を象徴とするという（しかもこの愛の力は理性的な男性のみが有する）⁵⁾。このエロスこそが賞賛に値する⁶⁾のである。このパウサニヤスの主張を、エリュクシマコスが別の視点から批判する。エリュクシマコスはパウサニヤスがエロスを二種類に区別したことを賞賛しながら、ただ少年の美を目指すだけでなく、徳も同時に目指すようなエロスこそが賞賛に値することを忘れてはいけないと注意し、さらに徳を通じて善さの実現へと向かうエロスこそが讃えられるべきであるという⁷⁾。

以上の三人に対して、アリストファネスは太古の人間について珍説を展開する。人間は本来、男女に分かれてはいなかったが、神々に対して不遜な態度を取り続けていたゆえに、ゼウスによって男女へと分けられてしまった。したがって人間が本来の姿を取り戻すために、みずからの片割れを探し求め、本性（原形）に還元しつつ自分のものなる愛人を獲得する時にのみ人間は幸福になることができるという⁸⁾。アリストファネスの次にアガトンはこう主張する。エロスは最も美しく高貴である。その意味で最も幸福な神である⁹⁾。さらにいえば、エロスは正義の徳、慎みの徳、勇気の徳、そして知恵の徳を備える¹⁰⁾。知恵の徳を持つゆえに、エロスにひとたび触れられると、誰もが詩人となってしまうのである¹¹⁾、とする。

ソクラテスはアガトンの言葉を受けて、アガトンの修辞法をたたえる¹²⁾一方、エロースが何者かについての愛であり、自分に欠けているものを求める¹³⁾のだとしたら、エロースは美を欠いていることになるので、エロース自身は醜いものということになる¹⁴⁾、といてアガトンを混乱させる¹⁵⁾。そして困惑したアガトンに対してソクラテスは、かつてマンティネイヤの婦人ディオティマからエロースについて聴いた話をする¹⁶⁾。

前述のような逆説が本当らしくみえるのは、ひとびとが中間というものを考慮しないからだ¹⁷⁾とソクラテスは言う。あるものが美を求めているからといって、そのものに美がまったく欠けているというわけではない。そのものには自分にもある程度の美を含みながら、さらにいっそう高い美を求めることもある。エロースとはそうした中間のものなのである。したがって、エロースは美でもなく醜でもなく、また善でもなく悪でもなく、その中間者でありまた仲介者である。

このように、プラトンは『饗宴』において、世間一般のさまざまなエロス論について諧謔を交えながら巧みに展開してみせ、その背後に密かにソクラテスを通じ

てみずからの見解を溶かし込んでいる。ここでのソクラテス - プラトンの主張をまとめると次のようになる。

エロスそのものは美しいものでも醜いものでもなく、エロスの本質は「欲求」たるところにある。ただし、その欲求は単なる欲求ではなく、「善きもの」あるいは「美しきもの」への欲求で、そうであってこそ真のエロスの名に値する。またすべての人間は「善きもの」や「美しきもの」に対するエロスを持ち、それを愛求する、しかも、その所有を永遠に欲するのである。よって、エロスとは、「善きもの」と「美しきもの」への欲望であり、またあの「善きもの」が永遠に自分のものとなることを目指すものである。一言で言えば、エロスが「善美なるもの」への希求としての愛であることは、ソクラテスやプラトンのもっとも基本的なエロスについての観点であり、そうした愛の獲得に人間の幸福が重ね見られることになる。

さらに、プラトンは『パイドロス』¹⁸⁾においてもエロスについて論述する。プラトンによれば感覚界において価値のある美しいものは、すべて、永遠の存在であるイデアにあずかることによって、美しくなるのであり、またそのことによって存在性をおびるのである¹⁹⁾。したがって、エロスはまず何よりも美しいものへの愛である。そして美はイデア界・感覚界にわたってはりめぐらされているのであって、これに対応して、エロスはイデア界と感覚界とを仲介し結びつけているのである。天地はエロスがなければ瓦解する。エロスは神々と人間の間にあって、両者のあいだを仲介し、間隙を満たしていることによって、全体は自己と結合している²⁰⁾。さらにまた美しいものは感覚界において特別の位置を占めていて、イデアを映す影のようなものだが、われわれは現象界においてその影像を広く見ることができるという²¹⁾。

『パイドロス』の神話によれば、人はこの世の美を見て、真の美を想起する、と言われているが、正義や慎慮やその他価値あるものについての、この世にお

けるいわばアイデアの影像を見ても、特別の光を発するものではないが、上で述べたように、美だけはこの世における影像が燦然と輝いていて明晰に視覚に映るとされる²²⁾。このために美は感覚界のうちにあつて、アイデア界への通路という重要な役割を果たすことになる²³⁾。感覚に映ずる美しいものは「美」のアイデアの反映であるゆえに美しいのであつて、それゆえ、美しいものはもっともアイデアに似ていると考えられる。エロースは単なる欲求ではなく美への欲求であることによって、直接にしる間接にしる、アイデア界への憧憬ともなり得るのである²⁴⁾。したがって、エロースは、美を媒介にして、アイデア界へと上昇しようとすることによって、真の知を得ようとする愛（ひいては愛知者そのもの）でもあるのである²⁵⁾。よつて、エロースは知と無知の間にあつて、美を手がかりにして、真の知を求める愛のひとつの形といえるのである²⁶⁾。

前述のことから、プラトンはエロースを、高きものを求める「欲求」としてとらえていることが分かる。それは具体的には、「善美なるもの」への欲求である。ただし、高みへ向かうエロースは「無知」と「知」の中間段階であり、そこにはヒエラルキーがある。美しい肉体に惹かれる通俗の恋愛もこのエロースの一段階であるが、ヒエラルキーにおいては最低の段階に位置づけられる。しかし、このような人間的情愛は決してプラトンが讃えるエロースではない。無論、愛する者が最初に向かうのが美しい肉体であるが、しかし、美しい肉体に向かったあとは、美しい魂に向かうことになる。それによつて肉体の美は魂の美よりも些細で価値の低いものあることに気づくことができる。ただし、その後、また美しい魂を通して真の知識へと向かつていかねばならない。これこそ愛の奥義に至る正しい道とされるからである。この道をたどることによつて、美そのものに到達することができるのである。したがって、正しき愛の道は、地上の美しいものを出発点として、この美そのものをめがけて上昇してゆくという過程を取るのである。言

い換えれば、真実の愛は、肉体の美への欲求から出発し、魂の美への欲求を経て、真の知へと向かって、上昇していくことになる。

これまで論述した如く、プラトンはエロースを「善美なるもの」への希求とし、さらに進んで彼自身の哲学の道を「エロースの真実の道程」として描いてみせている。すなわち、真実のエロースは「知」への希求であり、愛知（哲学）の営みを通してそれは実現されるとプラトンは主張する。

第二節 ニーグレンの愛論——エロースとアガペー

本節では、前節で見てきたエロースと対比的に語られるキリスト教の愛アガペーの特徴を理解するために両者を比較検討するニーグレン（Anders Theodor Samuel Nygren, 1890-1978）の『アガペーとエロース』²⁷⁾に依拠して考察を進めてみたい。それに先立ち、彼の語るエロース論について紹介してみたい。

エロースは、肉体の美に対する希求であっても、魂の美に対する希求であっても、また知性に対する希求であっても、各段階における美の内容が変わっていても、その本質なるものは変わらず、いずれも「美しきもの」と何らかの関係を持ち、その「美しきもの」への希求といえる。すなわち、この意味でエロースは、結局、価値が高いと思われるものを求める愛であると考えられる。ニーグレンも前掲著の序論において、ギリシア的な救いの理論の中心モチーフとされたエロースを、「欲望、自己中心的な愛」と見なし、以下のように説いている。

人間はその欲望の始発点と終着点の両者として、支配的な位置を占めている。始発点は人間の欲求であり、終着点はこの要求の充足である。人間が神にまで上げられることがこの救いの道の特徴である。人間の靈魂は、本質的には神的なものと考えられていて、その高い位置を沈思して、変わりゆく、かりそめの事柄に安心を求めることなどしないよう

にすることが必要である。まことの智慧は、この世の事柄から離れ、靈魂の翼にのって、さらに高い世界に昇ることであったが、その世界こそは、靈魂が肉体の牢獄の中に監禁されるようになる前には、靈魂の故郷であった。エロースとは、靈魂の郷愁、すなわち靈魂に真の満足を与えることのできるものを切望することであり、同時に、靈魂の高貴なことのしるし、また靈魂の存在に属すること、またはその現在の状態の中では、靈魂が本来必要とするものを痛ましくも欠いていることの二つの証言である。発作的に上昇切望の形態をとろうと、忘我見神と恍惚の中に神を楽しむという形態をとろうと、いずれにしても、エロースにおいて、靈魂は天への旅をするのである。²⁸⁾

このように、エロースは「欲望的」また「上昇的」な性格を帯びている愛であり、最高の形態においてさえ、「自己中心的」特性を保持している。

以上のエロース的特徴に対し、キリスト教の愛であるアガペーは、ニーグレンによれば、全く別個の性質のものであり、それは、欲望や切望と何のかかわりも持っていないと指摘される。その対比的な性質について、彼は次のように語る。

アガペーは、エロースのようには、自らの優位を確保するために、「おのれのものを求めず」、上昇しないで、却って、犠牲と自己投与という性格を持っている。また、アガペーがこの性格を帯びているのは、結局その原型が「神御自身の愛」であるからである。ここでは人間は神まで高められはしないが、神があわれみ深い愛の中で、人間にまで降りたもう。アガペーは、第一に、罪人に対して御自身を捧げるというキリストの十字架の中でもっとも深くあらわされた神の愛である。²⁹⁾

以上見てきたニーグレンの言葉を簡単にまとめると、「エロース」が人間的な愛であり、求める愛である。「アガペー」は神自身の愛であり、与える愛である。エロースが「欲望的」なのに対応して、アガペーは「献身的」である。またエロースの「上昇的」に対応して、アガペーは「下降的」である。ニーグレンが用いた「おのれのものを求めず」「犠牲」「自己投与」といった言葉は如実にアガペーの「献身的」性格を教示している。

第三節 神の愛——アガペー

さて、「神御自身の愛」とは、なんであろう。かつてマルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) はこのような言葉を語ったことがある。

神の愛は、その愛するものを見出すのではなく、これを創造する。人間の愛は、その愛するものによって生み出される。また、楽しまんがために善を見出す場所に行くのではなくて、悪しきものや貧しきものに善を捧げる場所に行く。そのようなものこそ、十字架から生まれた十字架の愛である。³⁰⁾

ルターが言う如く、神の愛はエロースのもっぱら「価値の高い」「善美なるもの」への追求に反して、「善美なるもの」より「悪しきもの」へと向かうのが特徴である。神の愛のこのような性格は、キリスト教の聖典である『聖書』³¹⁾においても数々記されている。

ファリサイ派の律法学者はイエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、

丈夫な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」³²⁾

イエスがなぜ丈夫な人のためではなく病人のために、また正しい人を招くためではなく罪人を招くために来ているのかについては、福音書に記載されている「見失った羊のたとえ」によって明らかになる。

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」と言うであろう。言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」³³⁾

羊のたとえにおいて、イエスは人間を百匹の羊に喩えて言っている。無論、イエスは百匹の羊を皆愛している。ただし、草原に残している無事な九十九匹の羊よりその見失った一匹の羊に一層関心を寄せているがゆえに、その見失った羊を見つけたときに味わった喜びも一層大きく感じている。この羊の喩えが諭す如く、イエスは悔い改める必要のない九十九人も悔い改める一人の罪人も皆愛している。しかし、悔い改める一人の罪人をこそ一層愛そうとしている。

というのは、その一人の罪人が悔い改めれば、悔い改める必要のない九十九人の正しい人を愛するよりも、より大きな喜びがあり、より大きな価値が生まれてくるとイエスは考えるからである。すなわち、イエスの愛する対象はエロースのように「美しきもの」だけに向けられるのではなく、あらゆる対象に、むしろより一層「悪しきもの」に向けられるのである。このように、キリスト教における神の愛は「価値があるから愛するのではなく、愛するから価値がある」という特徴を帯びる。神の愛のこのような特徴はまた福音書における「放蕩息子のたとえ」の話からも見出される。

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、「お父さん、私が頂くことになっている財産の分け前をください」と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部をお金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっけて豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、私はここで飢え死にしそうだ。ここを立ち、父のところに行って言おう。「おとうさん。私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。

「おとうさん。私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」しかし、父親はしもべたちに言った。「急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」そして、祝宴を始めた。ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。しもべは言った。「弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、おとうさんが肥えた子牛を屠られたのです。」兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」すると、父親は言った。「子よ、お前はいつも私と一緒にいる。私のものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」³⁴⁾

引用した如く、父親は、放蕩三昧を尽くした息子が、自分の罪を悔い改めて帰ってきたので、何も言わずに迎え入れ、涙を流して喜んだ。神の愛というのは、そのようなものであろう。神は、罪を悔い改めて神に立ち返ったらいつでも迎え入れるし、歓迎してくれる。以前はどんなに放蕩であろうと、帰ってく

れば赦してくれる。このように、神の愛は「悪しきもの」である罪人に向かう性質を持つだけでなく、また、「赦し」という「抱擁的態度」あるいは「包容性」をも帯びている。つまり、神はいつも「抱擁的」な態度をとって罪を犯した人を愛している。

『旧約聖書』イザヤ書 55 章においても、神の愛の赦しを論ず一節がある。

神に逆らう者はその道を離れ、悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに赦してくださる。³⁵⁾

このように、神はその愛する対象に応じて色合いの違った現れ方をする。病めるものや貧しいものに対しては、愛は憐れみとなり、罪を犯したものに対しては、愛は赦しとなる。さて、神は、その愛する対象に対して、その示された「包容性」をどこまで徹底して求めるのであろうか。マタイによる福音書の第 5 章に「敵を愛しなさい」という節が記されている。

あなたがたも聞いているとおおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。

だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。³⁶⁾

自分を愛してくれる人を愛する、自分と親しい人と挨拶をする、そのような愛は、愛する対象に左右されている。この場合についてイエスは、その対象が愛すべき価値を持っている限りにおいてその人を愛するのであり、それは罪人の愛でしかない、神を知らない異邦人の愛でしかないという。それに対し、神の愛は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせる、分け隔てのない無償の愛を意味する。すなわち、対象が価値を持っているかどうかを問わず、すべての対象に、「恵み」を与える愛である。つまり、神の愛は対象を選ばず、また自分を愛するように、隣人を愛し、敵をも愛する完全な対象愛である。

イエスはこうして愛の対象においてその広さを徹底的に求めている一方で、また愛の方法においてもその深さを徹底しようとする。

あなたがたも聞いているとおおり、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。³⁷⁾

愛の深さは、「目には目を、歯には歯を」という平面的正義の段階にとどまるのではなく、もし人が右頬を打てばさらに左の頬を向け、下着を取ろうとす

るものにはなお上着をも与えられるほどでなければならない。つまり、求めるものには与え、借りようとするものには背を向けず、相手の欲求を要求される以上にも満足してあげ、相手の状態や態度によって増減しない愛こそが真の愛である。要するに、神の愛は無条件の赦しであり、徹底的な包容である。

神の愛は、また以下のような「献身的」な性格を有している。ヨハネの福音書の第3章の16節に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」とあるように、「献身的」に世を愛している。神のそのような愛が、ローマの信徒への手紙にも同じく記載されている。

実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ人はほとんどいません。善い人のために命を惜しまないものならいるかもしれない。しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました。³⁸⁾

これまで述べてきたように、神は深く世を愛している。丈夫な人であっても、病める人であっても、そして正しい人であっても、罪人であっても、対象を選ばず、対象の価値の有無を問わず、世間のすべての人間を愛している。さらには、愛は、罪人を救うために、自分の子を犠牲にすることまで惜しまないのである。しかも、次の言葉に示されるように、その愛の方向は、私たちから神にではなく、神から私たちに向けられるのである。

愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛するものは皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は独り子を世にお遣わし

になりました。その方によって、私たちが生きるようになるためです。ここに、神の愛が私たちの内に示されました。私たちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち。神がこのように私たちが愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです。 39)

神の子であったキリストは、三十三年間地上で人間として生活し、彼の生涯はご自身を無にして与え尽くすものであった。そして、十字架の上でその愛を完全に示したのである。神はキリストによって、人間の世界に本当の愛を示したのである。

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「心、精神、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」 40)

心、精神、思いを尽くして神を愛することは、全人格的に全身全霊で神を愛することを意味する。神は、先に引用したように、独り子（御子）を犠牲にするほどに世の人を愛している。世の人を罪から贖うための生け贄として独り子を与えて、十字架につけさせ、死なせたほどに全面的に人間を愛している。神の愛

は真の愛であり、偽りのない愛である。それゆえ、人間も神が愛してくださるように全身全霊で神を愛するべきである。イエスは「隣人を自分のように愛しなさい」という第二の戒めを、第一の戒めと同じように語ることによって、神に対する愛と、隣人に対する愛を同じく扱った。つまり、この二つは分離しているものではなく、調和していることである。というのは、神への愛から隣人への愛が生まれるし、隣人への愛は神を愛することの表現であるからである。その証として、『聖書』の以下の言葉が上げられる。

「神を愛している」と言いながら兄弟を憎むものがあれば、それは偽りものです。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。⁴¹⁾

要するに、「神は愛」である。神の愛は無償的、無条件的、包容的、献身的、徹底的である。愛の本質は与えることであり、偽りのないことである。完全な愛は互いに愛し合うことであり、自分を愛し、また自分を愛するように、隣人を愛し、敵を愛し、さらに神が愛してくれるように神を愛することである。それは『聖書』の言う最も重要な掟である。

第四節 エロース・アガペーと「甘え」

第三節まで、愛の原型であるギリシアのエロースとキリストのアガペーについて見てきた。では、本稿が考察の対象とする「甘え」とこれらエロース・アガペーは一体どのようにかかわっているのか。

「甘え」は言語的起源からすれば、一種の憧憬と理解される。土居健郎によれば、それは、人間の原初欲求であり、愛されたい欲求であり、根源的に言うと、

それは対象との一体化の欲求である。つまり、甘えるものを主体とする場合、それは対象に向けられた原初的な一体化の欲求として発動する。それは、先に見たプラトンの言うエロースに近い。前述したように、エロースの愛は、一種の「欲望」であり、存在の根源理念である「善美なるもの」を求める上昇的な欲求である。したがって、価値の高いと思われるものを求め、一体化をはかる点では、ギリシア的エロースと「甘え」は共通しているといえる。ただ、プラトンの記述にあるように、われわれの内で、「善美なるもの」のところにたどり着ける者はほとんどいない。哲学的な素養を持ち合わせて生まれた者でさえ、太陽（善のイデア）を直接見られないように、上昇する者の行く手をそのイデアは阻むという。そして、幾多の試練を経てたどり着いたごくわずかな人間が哲人と称され、人々を導く地位を授けられるのだと説かれる。つまり、「甘え」と同様の方向性をエロースに見ることができるが、究極の一体化はプラトン論に従えば限りなく困難なものと想定される。

一方、『聖書』はキリスト教における神の愛「アガペー」について語っていた。このアガペーは、相手に何も見返りを求めない純粋な愛、無条件で無償の愛である。アガペーは、自己の描く理念を求める上昇的な愛ではない。高貴で聖なる神から罪深い不完全な人間に向けられた上から下への愛である。献身的、包容的且つ徹底的に与えようとする愛である。しかも、神の愛は独り子であるイエスを通じ、われわれ人間同志の内にも実現される。それは神を愛するように隣人を愛すという隣人愛を通して成し遂げられるという。このアガペーにも土居の「甘え」論との類似性を見出す。例えば、土居論では、母親（究極には天や宇宙）のように、根源的で温かい慈悲的な存在から降り注ぐ愛こそが「甘え」の源泉と考えられた。そして、現実の人間の内にも存在すると考えられるその根源性に互いに触れるべく、「甘える」・「甘えさせる」関係が成り立っているとも想定される。まさに、純粋で

利他的な愛が交流するキリスト教の隣人愛と似ていると感じられる（抑圧された利己的な「甘え」においては、隣人愛は成立しない）。

さらにここで、アガペーの無償の愛・隣人愛と土居の言う「甘え」との関係を見ていきたい。現実の「甘え」関係を考える際、無私的に注がれる愛の原型は、土居が言うように、まさに母親の愛といえる。それは、人間の他の形式の愛と比べると、神の愛であるアガペーに近いと考えられる。世間で言う母親が、わが子を妊娠、出産、養育する親として、どれだけ自分の子を大事にしているのかは言葉では表現できない。時代が移り変って、子どもに対する母親の愛の形が少し変わったとしても、その愛の本質はいつも変わらないものである。無条件的、無償的、献身的、包容的且つ徹底的といった性質を有することは変化しない。わが子であれば、いくら体の不健全な子であっても可愛がり、いくら自分の意に反しても優しく赦す。将来自分を養育してくれるかどうかを全く考えずに自然に愛し、ただわが子が幸せであれば自分も幸せだと感じる。わが子に何かを求めるのではなく、命まで捧げたいと思うほどにわが子を大事にしている。このような母親の愛は、世間のすべての人間をまるで自分の子のように愛する神の愛のようである。

では、そうした神の愛が、どのようにして「甘え」関係において隣人愛として実現するといえるのだろうか。われわれは普通、親としてわが子に自己犠牲的で無償の愛を注ぐことは多分に可能である。しかし、わが子を愛するのと同じように人の子や他者を愛することができるだろうか。たとえ心の底からその他者を愛そうとしたとしても、多く人はわが子のように自己のすべてをその他者のために尽くしきる（神の愛と重なる）ことはなかなかできるものではないように思われる。そう考えると、隣人愛の実現は厳しく、多くは母親の愛は結局人間の愛にとどまり、神の愛まで上昇できないといえる。つまり、不完全

な人間が神に近づける隣人愛の実践も「甘え」の隣人的な一体化の実現も、エロース同様、究極的には困難を伴うものであることが想像できる。

以上、「甘え」と愛の関係を、相異なるベクトルを持つエロースとアガペーを通して考察してきた。そこからは、完全で普遍的な存在と不完全で特殊な存在とがかかわる上昇的（甘える）・下降的（甘えさせる）構造が理解され、その一体化の仕組みと現実的な困難さを理解できた。

【付記】本論文が 2021 年度国家社科基金中华学术外译项目《古代宗教与伦理》【21WZXB005】的阶段性研究成果。（本稿は 2021 年度中国国家社会科学研究基金会中華學術著作外國語翻譯プロジェクトの研究課題『中国の古代宗教と倫理』【21WZXB005】の研究成果の一つである。）

註

- 1) プラトン著、久保勉訳『饗宴』（ワイド版 第一刷）岩波書店、2009 年。以後、同書からの引用は脚注に「前掲書」と書いて、頁数のみ記す。なお、ステファヌス（Henri Estienne, 1528-1598）版の引用番号も併記する。
- 2) 本稿では、「愛の神」のことを「エロス」と表記し、そして、その「神の愛」のことを「エロース」と表記することにする。以下同。
- 3) 前掲書、59 頁参照。178A.
- 4) 前掲書、64 頁参照。180D.
- 5) 前掲書、66 頁参照。181C.
- 6) 前掲書、65 頁参照。180E.
- 7) 前掲書、75-78 頁参照。186A-187E.
- 8) 前掲書、83-90 頁参照。189E-191E.
- 9) 前掲書、94 頁参照。195A.

- 10) 前掲書、97-98 頁参照。196B-196D.
- 11) 前掲書、98 頁参照。196D.
- 12) 前掲書、100 頁参照。198A.
- 13) 前掲書、108 頁参照。201B.
- 14) 前掲書、109-110 頁参照。201C.
- 15) 前掲書、104-110 頁参照。201A-201C.
- 16) 前掲書、110 頁参照。201D.
- 17) 前掲書、111-112 頁参照。201D-202A.
- 18) プラトン著・藤沢令夫訳『パイドロス』岩波書店、2003 年。(初版) 1967 年。
- 19) 山内友三郎「プラトンのエロース論に対する倫理的考察」『大阪教育大学紀要 第 I 部門 人文科学』第 26 巻 第 3 号、1978 年、133 頁参照。以後、同論文からの引用は脚注に「山内」と書いて、頁数のみ記す。
- 20) 山内、133 頁参照。
- 21) 山内、133 頁参照。
- 22) 山内、133 頁参照。
- 23) 山内、133 頁参照。
- 24) 山内、133 頁参照。
- 25) 山内、134 頁参照。
- 26) 山内、134 頁参照。
- 27) ニーグレン著、岸千年・大内弘助訳『アガペーとエロース』新教出版社、1963 年。以後、同書からの引用は脚注に「前掲書」と書いて、頁数のみ記す。
- 28) 前掲書、3-4 頁。
- 29) 前掲書、4-5 頁。
- 30) 前掲書、2 頁。

31) 『聖書』キリスト教の正典。英語のバイブル Bible という語は、古代の紙の原料とされたパピルスの芯を意味するギリシア語のビブロス biblos に由来する。このパピルスの巻物に文字を記したものを biblion とよび、書物の意味となった。その複数形がラテン語化して biblia となり、とくに聖なる書物を表すようになったものである。『聖書』には『旧約聖書』 Old Testament と『新約聖書』 New Testament があるが、その「約」は、「契約」を意味する文字である。キリストの最後の晩餐の場面には、十字架の血が、神と人間とのあいだの新しい契約となることが述べられている。このキリストの新しい契約に関する書物を『新約聖書』とよび、ユダヤ教の経典であったものを救主キリストの準備の書として『旧約聖書』とし、あわせてキリスト教のカノン（正典）とした。（『日本大百科全書 13』（初版 第一刷）小学館、1984年、345頁）

32) 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987年、マルコ 2:16-17。以後、同書からの引用は脚注に『聖書 新共同訳』と書いて、章節のみ記す。

33) 『聖書 新共同訳』マルコ 15:1-17

34) 『聖書 新共同訳』ルカ 15:11-32

35) 『聖書 新共同訳』イザヤ書 55:7

36) 『聖書 新共同訳』マタイ 5:43-48

37) 『聖書 新共同訳』マタイ 5:38-42

38) 『聖書 新共同訳』ローマの信徒への手紙 5:6-8

39) 『聖書 新共同訳』ヨハネの手紙 4:7-11

40) 『聖書 新共同訳』マタイによる福音書 22:34-40

41) 『聖書 新共同訳』ヨハネの手紙 I 4:20-21

Eros, Agape, and *Amae*

Huang Ping

Lecturer, Yanshan University

In this paper, we first delve into the desire for connection in *Amae* and *Love of Passion* by introducing Greek prototypes and focusing on the concept of love in Plato's *Eros* and the Christian *Agape*. We ethically reconsidered the relationship between *Love* and *Amae*. In this way, we can understand *Amaeru* as a complete, universal, and ascending love structure, and *Amaesaseru* as an incomplete, special, and descending love structure, thus understanding the mechanism of their unification and practical difficulties.